平成 22 年９月３０日

さ　く　し　ん

（校長室だより２５）

下氷鉋小学校
校長　大内　徹

秋色が濃くなり、しのぎやすくなってきました。１８日の運動会には保護者、祖父母の皆様には多数おいでいただきありがとうございました。熱中症等が心配されましたが、前日までの雨で暑さも和らいだせいか、体の不調を訴える児童も出ることなく、運動会を無事実施することができました。

運動会の短距離走では、目の前を駆け抜ける子ども達がとっても逞しく、また羨ましく目に映りました。あんなふうに走ることのできた時代に戻りたいものだと思ったのは私だけでしょうか。走るスピードに個人差はあれ、一生懸命に力を尽くす姿は素晴らしいものです。また、学年の発表や競技では、それぞれに学年の子どもたちの「可愛らしさ」「まとまり」「たくましさ」を感じました。息のあった一つ一つの動きに、練習の積み重ねを感じました。高学年保護者の皆様は、入学した頃のお子様の姿を思い浮かべながら、これまでの成長の跡を感じていただけたのではないかと思います。また、高学年の発表は、低学年の子どもたちに「やがては自分たちもあんなふうにやってみたいな」というねがいを持たせてくれたのではないかと思います。

さて、9 月のこの時期に各地で行われる運動会は日本特有の文化の一つであると認識していますが、いつ、どのように始まったのでしょうか。その起源については諸説があるようです。一説には、初代文相の森有礼が学校における集団的スポーツ行事を推奨したことで広がったようです。学校以外に各地区でも運動会が盛んに行われております。健康であること、体を動かすことのできるありがたさを確認する機会にもなるだけでなく、地区の参加者に心の通い合いや一体感を持たせてくれる素晴らしいイベントだなあと思います。運動会の種目内容はその時代の様相を反映しながら、変わってきている部分もあるのでしょうが、かけっこや大玉送り、玉入れ、綱引きは定番となっております。運動会の中身がどのように変わろうと、地域の行事としても大切にしていきたいものだなと願っています。地区には、運動会以外に公民館や育成会等の企画による様々な行事があります。お子様のいらしゃる家庭ではそうした地域の行事に積極的に参加していただければと願っております。地区の役員や係の方々だけでなく、一般の保護者の方々の参加が増し、行事への関わりが積極的、活発なものとなれば、地域ぐるみで子ども達を育てていく力、いわゆる「地育力」も活性化されることでしょう。地域の「地育力」の向上は、子ども達の育成力のみならず、大人自身の成長、精神的成熟にもつながって、ひいては地域の活性化、明るく元気で住みよい地域づくりをもたらすものと信じています。

話は変わりますが、八月に、戸隠下祖山在住の羽田様から二回にわたって、沢山のホタルの幼虫をいただきました。校長室前の廊下の水槽で育てています。生まれたばかりの目に見えないくらいの幼虫でも、顕微鏡で拡大し、ケーブルで結んだテレビ画面で見ると、ちゃんと形をなし、６本の足で動いていることが確認できました。0.5 ㎜もないくらいで、肉眼では確かめにくい大変小さな幼虫を顕微鏡を通して観察できた時には、私は大きな驚きと感動を覚えました。１，２ヶ月たった今は小さいながらも目で確かめることができるほどになっています。21 日の朝にはホタル集会がありました。長野ホタルの会幹事をお務めの羽田さんにご来校いただき、全校の子ども達にホタルについてお話いただきました。子ども達にも、ホタルの幼虫を顕微鏡で拡大し、スクリーン上で見せたのですが、ホタルの幼虫が動く度に、「うわっ、動いた！」と反応しながら、興味深く見入っておりました。集会のあとも、校長室前の水槽前で立ち止まって、拡大鏡を通して幼虫の動きを観察している子ども達の姿が増えています。生まれて間もない幼虫を見せたことによって、ホタルへの興味や関心も増してい

るように思われます。理科でも学習する水中生物への興味や関心につながっていけばいいなあと欲張った願いをもっています。

27 日には、長野南署、交通安全協会、交通安全支援センターの方々においでいただき、自転車の安全な乗り方や歩行の仕方について、校庭に白線で引いた模擬道路で実地指導をしていただきました。いくつか大切なことをご指導いただきましたが、その中でも、教えていただきましたキーワード「ハラヘッタベサ、ブー」が頭から消えません。紹介します。【ハ】：ハンドル【ラ】：ライト【へ】：ヘルメット【タ】：タイヤ【ベ】：ベル【サ】：サドル【ブ】：ブレーキ　です。乗る前の「ハラヘッタベサ、ブー」の点検・確認はとっても大切なことですね。お子様に任せっきりにせず、保護者の目でも点検して、安全な自転車に乗っているか、乗ろうとしているか指導していただきたくお願いします。この日の夕方、父が入所しているケアポートから自転車で洗濯物を持ち帰ったばかりの妻に向かって「腹減ったべさ！ブー！」と言ったら、「ブーブー」言わないでと、怒られてしまいました。

28 日、本校では 3 学年の学級で算数の研究授業がありました。研究授業とは、全校の先生方がある一つの授業を参観し、あとの研究会で指導のあり方を探り、自身の指導力を高めていこうとするものであります。それまでに、余りのない割り算を学習してきた子ども達が、余りのある割り算を初めて学習する場面でした。 ゼリーが□個あります。1 人に 3 個ずつ分けると何人に分けられますか。 の問題カードを提示し、ゼリーが１２個の場合、１５個の場合を考えさせました。「１２÷３で答えは４になる。4 人に分けられる。」「１５÷３で答えは 5 になる。5 人に分けられる。」そのような答えが子ども達から出てきました。それを、おはじきを１２個（１５個）机の上に出させて、３個ずつの固まりに分けながら、考えさせました。ここまでは復習の段階です。次に、ゼリーが 14 個だったときは何人に分けられるのかを考えさせました。大人だったら、「14 ÷ 3 は　4 で余りが 2」とすぐに答えが出てきます。しかし、初めて余りの出る割り算と出会う子ども達です。とまどっている子もおります。研究会の中で、ある男の子の学びの姿が話題にあがりました。その子は、机のおはじきを③③③③と分けて置きながら（③はおはじき 3 個分)、その 3 個ずつのおはじきの固まりの隣に、おはじきを 2 個置きました。そしていぶかしそうに、3 個ずつのおはじきの固まりを指で 1、2、3、4 と数えては、残りの 2 個をどのように扱ったらよいかとまどっているようです。今度は、3 個ずつのおはじきの固まりを指で、本当に 3 個あるのか確かめているかのように数えています。そして今度は、きちんと 3 個ずつのおはじきを真っ直ぐにそろえて並べて、同じ高さ（数）だけあるのか、間違いなくあるのかを確かめているようです。一番右側に置いてある 2 個のおはじきの固まりは、他の 3 個ずつの 4 つの固まりとは高さもそろわないことに気づいているようです。大人の目からすると、随分遠回りをしているようにも見えますが、割り切ることのできない余りのある割り算と「変だな」「困ったな」という感覚で出会っている場面でした。算数では、このように、おはじきなどの具体物を使った操作が考えや理解、追究を容易にしたり深めたりします。この一時間の授業研究だけでも、子どもの学びのプロセスについて学ぶものが沢山ありました。困ったり戸惑ったりしながら、新しい学びと出会い、理解を深めていく子ども達のけなげな姿から、私自身も多くのことを学びました。本校のどなたかが「迷いの中に授業の宝がある」と仰っておりましたが、同感であります。そして、このことは授業の中での学びだけでなく、子ども達のみならず私達自身が歩んでいる人生の学びについても当てはまるように思えるのです。戸惑い、迷い、困難、失敗といった事柄をマイナスな negative なこととして避けるのでなく、それらをしっかり体験しながら、学んでいく構えを持たねばならぬと考えています。

昨日は学校保健委員会で、長野市保健福祉部の藤田啓一先生から、「虐待について考える」という演題でご講話をいただきました。昨今ニュース等で話題にあがってくることでありますが、児童虐待やハラスメント等、気がかりなことがございましたら、校長、教頭、養護教諭がその窓口になっておりますので、ご遠慮なくご連絡下さるようお願いします。